

## 西川伸一の オススメシネマ⑦

### パッドマン 5億人の女性を救った男



実話をもとにしたセミノンフィクションの映画。まず、この映画ポスターに度肝を抜かれる。主人公のラクシュミ（アクシャイ・クマール）が左手に掲げているのは生理用品である。二一世紀に入っても、インドの女性の生理用品使用率は一〇%そこそこにすぎなかった。高価なため、多くの女性は不衛生な布で処理していた。このため死に至る場合もあった。それを

終わる。改良を重ねてももう彼女は応じてくれない。女子医科大に赴いて協力者を募っても徒勞に。ならばと、女性用下着をはいて知人から動物の血をもらい自ら着用する。最初こそ順調だったものの、やがて血を吸収しきれずズボンが血だらけになる。気を動転させたラクシュミは聖なるガンジス川に飛び込んでしまう。川を血で汚した彼は村にいられなくなり、ガヤトリは実家に戻される。

それでもラクシュミは大学教授の使用人として働きながら、情熱を絶やさず。ついあるとき、生理用品にはセルロース（繊維素）が使われていることを知る。メーカーに照会してセルロースのサンプルを取り寄せる。届いたのは白い板状のものだった。先方の間違えだとラクシュミはそれを放り出す。そこに教授宅に飼

医師から教えられたラクシュミは最愛の妻ガヤトリ（ラーディカー・アープテ）を思っ、奮発して生理用品を買って帰る。ガヤトリはその値段をきいてとても使えないと突き返す。

そこでラクシュミは実物を検分して、こんな単純な製品が五五ルピーもするのかと憤る。そして綿と接着剤を使って自作を試みるのである。次の月経時にガヤトリに使わせるが失敗に

われていた犬が寄ってきて、前足でその板状のものを引っ掻きまわす。するとみるみる綿状に形状が変わる。この犬の演出はうまい。

ようやく満足できる試作品が完成する。ただそれを試してくれる女性が見つからない。ある夜、その用意がなくて困っていたパリー（ソナム・カプール）に出会う。翌朝、ラクシュミはパリーに使い勝手を尋ねに行く。そして、あ

れは自作の製品であると打ち明ける。パリーは驚きながらも、市販のものとは変わらなかったと言う。この一言が彼の人生を一変させる。

ラクシュミの簡易な生理用品製造機はインドの発明大会で優勝する。製品はわずか二ルピーで売られた。パリーの協力を得て販売システムを整え、瞬く間に女性たちに受け入れられていく。この功績からラクシュミは国連にまで招待される。彼は感動的なスピーチを行い、パリーとともにホテルに戻る。二人が抱擁しようとした瞬間にラクシュミのスマホが鳴る。ガヤトリからだ。パリーはラクシュミの心の内を察知して身を退く。このシーンは切ない。帰国した彼はガヤトリと再会してエンドとなる。

イギリス映画『わたしは、ダニエル・ブレイク』（二〇一六）に、困窮した女性が生理用品を万引きして捕まるシーンがある。ラクシュミは貧しい女性たちのまさに救いの主だった。

生理用品という扱いづらいテーマを真正面にすえ、コミカルに仕上げたR・バールキ監督の手腕はすごいと思った。『パッドマン』というタイトルもうまい（padとは生理用ナプキンの意）。「朝日新聞」一月四日に関連記事あり。二〇一八年二月二日・TODHOシネマズ新宿（にしかわ・しんいち／明治大学教授）